

テレカコレクション

< 書籍・出版編 >

健

すでにお気づきのことと思いますがこのコーナー、実はタイトルに偽りありである。テレカコレクションと言いつついろいろなプリペイドカードを掲載している。携帯電話の普及やテレカの偽造問題でNTTがほぼ撤退状態。テレカを販促品にする企業が減り、クオカード・図書カードなどにシフト・チェンジしているためだ。今後はカード・コレクションにタイトルを変えなければならない。



コレクションも図書カードの占める割合が多くなっている。そこで今回は図書に関係ある出版社のカードを掲載しようと思う。このジャンルは本の抽選品に応募して蒐集してきた経緯がありコレクションの中で最も多い枚数がある。これまでも「文庫」「趣味」「雑誌(創刊号・記念号)」「読書(文学)」「ビッグコミック」「漫画」編という切り口で掲載してきた。カードを見ただけでは明確な違いが分からないかもしれないがテーマは書籍・出版社である。主に本の写っているもの、出版社をイメージするものを揃えてみた。出版社については書く材料がほとんど無いので差し当たり好きな出版社という切り口で書き始めることにする。実際は本の中身がどうかという話だから出版社の話をして意味はないかもしれない。敢えて言うならば小学館だろうか。何か良心的なコンセプトを持っているように感じるからで深い意味は無い。

最近注目しているのは河出書房新社やちくま書房、ワイズ出版などだ。自分の趣味や知りたい事をまとめたもの、復刻版の発行をしてくれる度合いが多い。特にワイズ出版は映画好きの社長が作った会社なので映画・漫画・写真の分野で趣味人向けの本を多数出版している。他には宝島社の出している別冊シリーズもいい。知識マガジンとして幅広いテーマを取り上げているので興味のある号は蔵書している。光文社は子供の頃愛読していた「少年」(鉄腕アトム・鉄人28号を掲載)、江戸川乱歩の少年探偵団シリーズを発行していたので好きな出版社だった。ついでながら少年探偵団シリーズは今も発行しているポプラ社のものより絶版になっている光文社の物の方が好きだ。中身は一緒なので結局装丁の違いという事になる。そういう意味で嫌いなのが岩波文庫だ。表紙がどれも同じで味も素っ気も無い。それをカラーにしているところもあるので仕方ないか。



レコードのジャケット買いがあるように。自分も本の装丁、タイトルで選ぶ事が多い。だが中身を知らずに買うと当たり外れが多いことも事実だ。最近は節約する必要もあり数頁読んで見てから買うことにしている。装丁で好きだったのが早川書房のポケット版だった。SFとミステリーのシリーズを出していた。外国のペーパーバックを模したもので独特のサイズ。SFにはまっていた時はこれで読むのが格好良く思っていた時期があり書店のカバーもかけずに読んでいた。今思うとこれみよがしで気恥ずかしいものがあるがこの本の装丁は薄い透明の

ビニールカバーがしてあるという理由もあった。

難点を言えば価格が高い、独特のサイズのため本棚に収納しにくい、ビニールカバーが破損しやすかったことだ。今は文庫に変わってしまい古書店でしか見かけないが当時のSFファンにとっては一種のステータスだった。

以下は本に関し思ったことを羅列してお茶を濁すことにする。



【ビジュアル誌】

最近、本屋で多いなあと思うのが団塊の世代を狙ったと思われる出版物だ。昭和レトロものから大人のためのお店ガイドやライフスタイルものなどだが最たるものが「世界遺産」「週刊20世紀」「日本の祭り」「古寺をゆく」などといったシリーズ物のビジュアル誌だ。大判だが紙数が無く創刊号は破格的に安い以降は一冊500円程度になり順次発行されると30~50冊となる。これで採算がとれるほど売れるのか訝ってしまう。それに輪をかけたのがマニア向けに発行されたと思われる「クラシックカー」や「ぬいぐるみ」などのコレクション付きビジュアル誌だ。全冊揃えるとそれなりのコレクションが揃うというわけだが真のコレクターというのはこういうものには手をださないものなのだ。

ただ「大人の科学」だけはプラネタリウムだの実験道具などが付いて興味を引くが高いし手をだすと切りが無くなるのでじっと我慢している。

【ブックカバー】

本屋があるとつい入ってしまう習性があるので書店のブックカバーもいつのまにか溜りコレクション化している。本にブックカバーをするのは本の痛みを防ぐのが目的だが何をを読んでいるか隠す場合もあるだろう。電車で本を読んでいる人がそばにいと気になる性質だ。自分の場合は見られても構わないがカバーもおしゃれの一つとして気に入った書店のカバーをかけていた時期もあったが紙は持ちが悪い。今は皮製のカバーを愛用するに至っている。但し、家では外してしまう。本棚に並べたものを見て悦に入るためもあるが棚に入らず積んであるのも多いのでカバーをしていると本を探すのが大変なのが一番の理由だ。それにしても最近の本屋のカバーのかけ方は雑。ただ引っ掛け

るだけだしあらかじめ本の高さに折っている割にはサイズがぶかぶか。昔の本屋さんは勘定している間に手早くかけてくれたものだ。手際が悪く時間がかかるのとエコに貢献のためカバーは辞退している。

【立ち読み】

立ち読みは本屋にしてみれば万引きの次に嫌われるものだが個人経営の書店が減った今店員も文句は言わない。コンビニでもたまに立ち読みはご遠慮くださいのアナウンスが流れるが誰も聞きちゃいない。だが立ち読みするならマナーがあるはず。

雑誌の棚にへばりつくようにして読む者が多いが後ろに人が来たら本が取れるぐらいのスペースは空けてもらいたい。本の上に自分の荷物を置くのもご法度だ。本は大事にと躰けられた自分には許せんものの一つ。自分の荷物は床に置くと汚れると思っているのだろうが困ったものだ。雑誌は両手で持って開き読みすると表紙に指の折れ跡がついてしまうので自分の場合は背の部分を手のひらに乗せ丁寧に読む。人が読んだ本でも元の位置に戻してないと気持ちが悪いので入れ直してしまう。ついでに逆さの本も直す。やっかいな性格だ。決して几帳面な性格ではないんだけどね。





その後のことは知らないが癖になってしまいこれまた蒐集物の一部になってしまっている。栞も読書家のアイテムの一つではあるが読んで

いる時は結構じゃまになるので自分はほとんど使わない。紐の栞が付いている時は使うが無い場合は読みかけの頁を覚えておく。昔は文庫本でも紐の栞がついていたものだがコスト削減からか今では新潮文庫ぐらいになってしまった。

【栞】

いつだったか cacco 氏がお金のかからないもので集められるものがないかというので本屋に置いてある栞とか正月に出る定期入れ用のカレンダーをお奨めした。本屋にあまり行かないというので本屋に行くたびに持ち帰って提供していたが或る時一杯になってしまったのでしばらくは要らないと言われてしまった。

